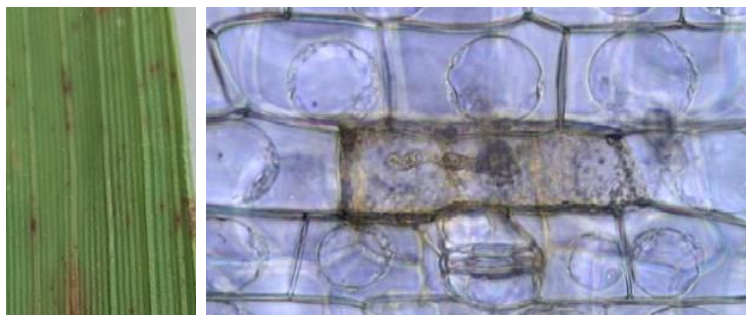


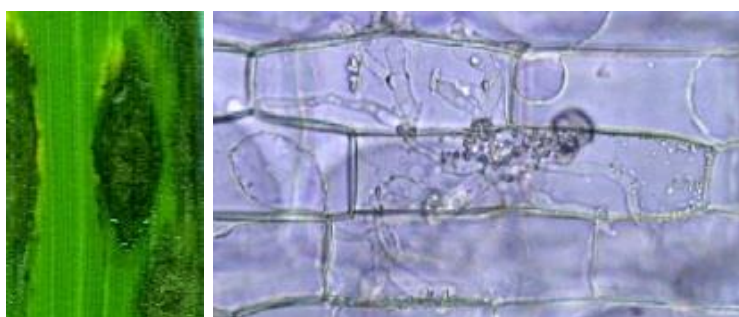
イネいもち病の病斑型

1. 褐点型



病斑が微小な褐点で止まっています（左図）。少肥状態など、稲体の抵抗性が高い時に見られ、いもち病菌に侵入された細胞が褐変壊死します（右図中央）。これはイネの抵抗反応で、周辺の細胞への侵入拡大は見られず、この病斑上で胞子が形成されることもありません。下葉によく見られます。

2. 進展型



病斑は楕円形で、紫をおびた灰緑色です（左図）。多肥状態や天候不順で稲体の抵抗性が低下した時に見られます。イネの抵抗反応は起きず、いもち病菌に侵入された細胞は壊死しませんが、侵入された細胞から周囲の細胞へ菌糸が拡大していきます（右図）。この病斑上では大量の胞子が形成され、病勢が急進展します。

3. 停滞型



紡錘形で、中央の灰白色の崩壊部、それを縁どる褐色の褐変部、さらに外側に黄褐色の中毒部が見られます。紡錘形の両端から出ている褐変した葉脈は「壊死線」で、いもち病に特徴的な症状です（左図）。湿潤状態が続くと、崩壊部に大量の胞子が作られ（右図）、黒っぽくなります。高温乾燥が続くと胞子は作られず、崩壊部は白っぽくなります。

* 初発時に見られる病斑



いもち病は、進展型病斑の周囲に褐変部の縁取りができはじめ、病斑上下に「壊死線」も現れて停滞型に移行してくると発見しやすくなります（左図）。初発の発見時は、褐点型、進展型、停滞型が混在していることが多く（右図）、進展型は水滴が残りやすくなります。

6月下旬は初発の可能性が高まっています。停滞型に移行する前に進展型での発見に努めてください。